

# 新古典派原理批判から見たマルクス労働交換論の再評価

岡田元浩（甲南大学）

## 1 序論

本報告は、労働交換をめぐるマルクスの理論見解を新古典派経済学におけるそれと比較対照し、後者の原理批判という観点から前者の再検討をおこない、その意義と限界を明らかにすることを目的としている。

本報告はまず、「限界革命」にはじまる新古典派経済学の形成・発展過程における労働交換論のあり方を、dehumanisation というその本質規定から捉え、解説する。さらに、新古典派労働交換論の歴史において転換点をなす効率賃金説と、ラディカル・エコノミストたちによる同説の受容にふれ、その問題点を指摘する。続いて、労働力と労働の区別をベースとするマルクスの労働交換論に立ち入り、新古典派批判の見地からその再評価をおこなう。最後に、マルクスの労働価値説がはらむ問題を取り上げ、同説とマルクスの労働交換論との矛盾を明らかにする。

以上の議論から次の結論が導かれる。マルクス自身は生前新古典派経済学説を知見する機会を持たなかったものの、彼の労働交換論は、市場取引での労働条件の決定を原理とする新古典派理論に対し、その基底をなす問題の洞察を導くことで、この原理の批判への有力な手がかりを与える。しかしながら、従来マルクスの経済理論のコアをなすものと目されてきた彼の労働価値説、とりわけ抽象的人間労働に関するその見解は、マルクスの労働交換論の本旨と撞着し、結果、新古典派原理批判にてらしたその有効性をおとしめるものとなっている。

## 2 新古典派労働交換論の形成と確立

新古典派経済理論の本質的特徴の1つは、限界原理に基づく生産・分配論の構成と市場理論へのその包摂である。ここでは生産・分配条件のすべてが市場で決定される。そしてこの原則は資本財や土地のみならず、労働交換に対しても画一的に適用されている。この無差別化は、マルクスが酷評した「俗流」経済学者の「三位一体論」の系譜にあるといえるが、マルクスが土地や物財も価値を生み出すとした「俗流」経済学者達の論法を、それら生産手段・対象の personification と見なしたのに対して、新古典派経済学者達のそれは

労働力の *dehumanisation* といえよう。この言わば暗黙の前提の上に、賃金率や労働量が市場取引の場で決定されるという新古典派の労働交換原理が導かれている。

以上の方向性は、新古典派経済学の基盤を築いた「限界革命」の担い手達の著作にすでに現れている。一般均衡理論の確立者でもあるワルラスの労働交換論はその代表例といえる。注目すべきは、マルクスの労働力と労働の区別に相当する、労働能力と労働用役の区別の明確化をワルラスが唱えていることである。しかしながら、マルクスが労働それ自体を市場取引の対象となれないものと見なしたのに対し、ワルラスは労働用役を数量化し、さらにそれを市場取引可能なものとして彼の「生産方程式」に組み入れている。ワルラスは、労働能力の価格は労働用役の価格を純収入率で割り引くことで導き出されると考え、また労働用役量が労働者数と労働時間によって示されると述べている。ワルラスは土地や資本財に対しても同等の取り扱いをしている。だがこれらの物的要素については、それらの物理的属性における同一性がその用役の同一性を保証することから、用役市場の取引単位の確定に基本的問題は生じない。だが、所有者自身の存在から切り離しえない労働能力の行使は、その所有者の意志やさらにはそれへの外的影響から独立ではありえず、自由度をもち、結果、仮に労働能力の分類化が可能であったとしても、同一労働能力の所有者による一定期間のその行使が同一の用役を生み出すという前もつての保証は何ら存在しない。それゆえ、労働用役量を単に労働者数と労働時間によって測定することはできず、したがってそれらを労働用役市場の取引単位とすることは市場原則と矛盾する。マルクスの労働力 - 労働区別が本質的にこの両者の分断に関わっているのに対し、ワルラスにはそうした認識が全く見られない。しかしながら、この労働交換の拠って立つ人間的基礎への無視の上に、*tangible* でしかも産出高から独立した労働単位を必要とする新古典派の労働市場理論が築かれているといえる。

ワルラスと並ぶ「限界革命」のチャンピオンであったジェヴォンズは労働能力と労働用役の明確な区別を示していない。だがジェヴォンズの労働理論はより具体的であり、かれは労働強度の可変性を認め、労働量が労働時間のみで測定できないことに気づいていた。そこからジェヴォンズが導いた結論は、労働はそれに伴う苦痛によって測定しなければならないというものである。しかしながら、ジェヴォンズ的な労働強度の可変性とは、マルクス的な労働力と労働の分断からもたらされるそれではなく、労働時間の延長に伴ういわば生理的消耗に基づくものであり、したがって機械稼働の持続から生じ

る減耗と本質的に異ならない。事実、ジェヴォンズは一定の労働時間に伴う苦痛それ自体の可変性を看過している。

「限界革命」期以降に見られる新古典派経済学の労働交換論の展開は、ワルラスやジェヴォンズの理論にある上述のような問題を注視するよりも、その **dehumanisation** の傾向を推進していく道をとった。限界生産力説から完全分配問題を論じたウィックステードは、労働、土地、資本という生産要素の一般的区別すら否定した。ヒックスやドブリューその他の一般均衡理論では、労働は何ら特定の投入物でなくなっている。そしてサミュエルソンやスティグリッツに代表される現代の経済学教科書では、本質的に他の市場のメカニズムと同一の、極大化原理に基づく労働者・企業の供給・需要の均衡による賃金率、労働量の決定という労働市場原理が、限界理論を基盤に提示され、経済学の常識として流布されている。

### 3 効率賃金論とラディカル・エコノミストによるその受容

20 世紀第 4 四半期以降のいわゆる情報の経済学の台頭・普及を背景に登場した効率賃金理論は、新古典派労働交換論の歴史における最大の転換要素とみなして過言でないだろう。その理論の基底をなす認識は、所与の期間内に 1 労働者によって行われる実質的労働量は本来可変的であり、その大きさを与件とみなすことはできないというものである。したがって、同じく労働強度の問題に着目しながらも、所与の労働時間内での労働量自体の可変性を考慮しなかった既述のジェヴォンズをはじめ、それまでの新古典派経済学者達が看過してきた視点を提起している。効率賃金論はこの認識を不完全・非対称情報条件に適用し、賃金変化が労働モニタリングや失業コストを介して実質的労働量 (**effort**) に及ぼす影響を説明する。またこれにより、不完全雇用均衡の理論的根拠が提示されている。

効率賃金論とのかかわりで重視すべきは、ボールズ、ギンタスに代表されるラディカル・エコノミスト達によるその受容である。彼らはこの理論の淵源がマルクスによる労働力 - 労働区別にあると考え、彼らの対抗的交換 (**contested exchange**) 理論の分析モデルとして採用している。このモデルの要点は、労働モニタリングや失業コストを考慮した労働者の効用最大化から、各賃金水準に対する **effort** が決定され、使用者はこの労働者の反応関数を既知として利潤最大化をもたらし賃金額を決定するというものである。したがって、方法論的個人主義に基づく労働条件の決定が堅持されているのであるが、さらにこのモデルは重大な矛盾を孕んでいる。すなわち、使用者によ

る effort の数量認識を前提しない限り、その利潤最大化要件は導出しえないが、これは原理的に effort を対象とする市場取引、したがって、新古典派原理に基づく、マルクスが否定した労働そのものの売買の成立を排除し得ない。こうして効率賃金理論とラディカル・エコノミストによるその受容は、労働交換に関する新古典派パラダイムの否定を導く一貫したロジックを提起しえていない。

#### 4 マルクスの労働交換論

マルクスは『経済学・哲学草稿』や『聖家族』など初期の著作から、労働諸条件が調和的な市場均衡によってではなく、労資の socio-political な抗争を通じて決定され、特に資本家が支配力を持つ社会においては、労働条件は限界まで悪化を強いられることを強調していた。マルクスはこの視点を終生持ち続けた。したがって、労働交換のあり方に対するマルクスのビジョンは、一貫して新古典派的なそれと対立するものであった。他方、成熟したマルクスの経済理論は、Grundrisse によってその方向が確立され、『資本論』において一応その完成をみる。問題は、マルクスが到達したこの理論体系と労働交換をめぐる彼の基本的スタンスとの整合関係である。

マルクスの経済理論の展開においてとりわけ重要な意義を持つのは、Grundrisse 以降で示される労働力と労働の区別である。言うまでもなくこれは、労働価値説に支えられたマルクスの剰余価値論＝搾取論の基礎となるのであるが、実はこの区別から派生するマルクスの論点は、その理論体系の基幹の1つをなす労働搾取説とは独立に、既述の労働交換に関する彼のビジョンを裏付けるものとなっている。マルクスは、労働市場の取引対象となるものがあくまで労働力であり、資本家による一定期間の労働力使用権の入手は、その実際の行使すなわち労働に関する保証を何ら与えるものでないことを強調する。マルクスは労働者の意志に依存する労働行為が本来持つ可変性を認識し、労働力の属性から労働を確定することの不可能性を理解していた。このように、マルクスの労働力-労働区別は、労働能力・労働用役というワルラスの類似の区別と異なり、労働関係の持つ人間的基礎から生じる両者の分断を内包するものである。ところでこの前提に立つと、労働量の測定基準は労働用役自体に求める以外に他はない。マルクスは、具体的有用労働—これこそが新古典派経済学者達の考える労働概念に他ならないのであるが—が多種多様性を持つことを指摘している。だがマルクスは具体的有用労働それ自体を数量的に認識することは不可能であると示唆する。これは、効率賃

金モデルが暗に前提したような、労使双方による effort の数量把握を否認し、さらには、そこからの労働用役の同一性を保証する明確な取引単位の存在を要件とする、新古典派的労働市場の成立を否定するものとなる。こうして労働力・労働の区別に基づくマルクスの労働交換論は、労働条件の市場決定を説く新古典原理への反駁を導き、socio-political な要因がその決定に不可避免的に介入することを根拠付けるものとなっている。

## 5 労働価値説がもたらす矛盾

転形問題をはじめとしてマルクスの労働価値説における不整合性に関しては、これまで数々の議論がなされてきた。ここで取り上げるのは、そこでの抽象的人間労働論がこれまで述べてきたマルクスの労働交換論との関わりでもつ矛盾である。マルクスは種々の具体的有用労働がそれ自体では通約不可能であると考えたが、彼の労働価値説の展開上必要となった労働間の量的比較のために、抽象的人間労働概念を導入した。そして實際上マルクスがその単位とみなしたのは単純労働である。彼は資本制下での生産力拡大の推進力となる機械化が労働者から熟練性を奪い、労働の一般的性質が均質化された単純労働へと収斂していくことを説いた。さらにマルクスは、複雑労働や強度化された労働が単純労働に還元されうること、いささか安直な論法で主張している。だがこのような議論に立てば、単純労働、より具体的にはその労働時間を取引単位とする市場の成立を原理上妨げるものは存在しない。ここでは労働自体が売買されるのであり、マルクス本来の論点と撞着する。それゆえ、市場での労働条件の決定を説く新古典派原理の否認論拠をも失うことになる。

新古典派原理の否定を導くマルクスの労働交換論は労働力と労働の区別に基づくのであるが、従来この区別は一般的に彼の搾取説の原点として位置づけられてきたし、マルクス自身そう見なしていたといえよう。だがマルクスの搾取概念が彼の労働価値説によって基礎づけられている以上、それは彼の労働交換論の本旨と矛盾するものといえる。こうして、従来マルクスの経済理論のコアとされてきたその労働価値説・搾取論は、労資の階級闘争を通じての労働条件の決定を説くマルクスの基本的立場と齟齬する、という帰結が引き出される。

## 6 結論

本報告ではまず、新古典派経済者の労働交換論と、効率賃金論およびラディ

カル・エコノミストによるその受容に触れることで、それらの特性と問題点を解説した。つづいて、これら学説との比較対照に立ってマルクスの労働交換論の意義を明らかにするとともに、マルクスの労働価値説とりわけそこでの抽象的人間労働概念と彼の労働交換論との不整合性を指摘した。以上の論述により、労働力 - 労働の区別に基づくマルクスの労働交換論が、労働条件の市場決定を説く新古典派原理の基底にある、労働関係の dehumanisation の矛盾を明るみにし、その原理の否定を導く有力な内容を含んでいることが示された。market-directed economy のグローバル化をトレンドとする現在の資本主義社会では、労使関係に関しても、規制緩和の推進による市場ベースでのその解決が声高に説かれている。そしてこの論拠が明らかに新古典派的労働交換原理にある以上、今日の資本主義を批判的に捉える上でマルクスの労働交換論が持つ意義はきわめて大きいといえよう。だが同時に本報告では、従来マルクスの経済理論におけるコアとされてきた彼の労働価値説が、その労働交換論の本旨と抵触し、新古典派原理否定の根拠を失わせるものであることを指摘した。それゆえ、マルクスの労働交換洞察がもつ今日的意義を再評価し活かすためにも、すでに欠陥が幾多指摘されてきた彼の労働価値説やそれを基礎とする搾取説をマルクスの経済学の本質と見なす趨勢の根本的見直しが必要になるのである。

#### 主要参考文献

- Bowles, S. and Gintis, H. 1990a. Contested exchange: new microfoundations for the political economy of capitalism, *Politics & Society*, vol. 18, June, 165-222
- Debreu, G. 1959. *Theory of Value*, New York, Wiley
- Hicks, J. R. 1946. *Value and Capital*, Oxford, Clarendon Press
- Jevons, W. S. 1957. *The Theory of Political Economy*, New York, Kelley & Millman
- Marx, K. 1988. *Economic Manuscript of 1861-63*, in *Karl Marx Frederick Engels Collected Works, Volume 30*, Moscow, Progress Publishers
- Marx, K. 1996. *Capital, Volume I*, in *Karl Marx Frederick Engels Collected Works, Volume 35*, New York, International Publishers
- Marx, K. 1998. *Capital, Volume III*, in *Karl Marx Frederick Engels Collected Works, Volume 37*, New York, International Publishers
- Samuelson, P. A. 1973. *Economics*, Tokyo, McGraw-Hill
- Stiglitz, J. E. 1997. *Economics*, New York, Norton
- Walras, L. 1954. *Elements of Pure Economics*, London, George Allen & Unwin